

# 新米冒険者の 敗北





「へっへっへ…  
オラ！大人しくしな！」

「こんなに大勢で…卑怯者！  
離してっ…！」

「お頭、どうぞ」

「ハハツ、外は危ないって教わらなかったのか？  
弱っちいガキ二人でうるつくのが悪いんだよ。  
おい、足もしっかり抑えとけよ」

「へっへっへ」

「サラッ！」

「ヒビヒビ…お友達がどうなるか  
よく見学しとけよ」





「どりあええ準備だな…。  
まずは一回気持ち良くなっとけ」

「あっ!!」

「どっ触っ…んっ…!!」

「お、良かったなあ、お前。  
お頭の指テクはウリの女でも  
3分も保たねえ神業だぜ」

「くっ…ん…」

「やめっ…あんっ!!」

「…だめえ…!!」

「何してるのー!  
サラに酷いことしないでー!!」

「あん? お前分らないのか?」

「だったら尚更よく見とけよ…!!」





「んあっ!!  
あっ!!...ふあああ.....」

「お、履いたまま潮噴いちゃったのか?  
最近のガキは我慢が出来ねえな」

「ギャハハ!  
こんなウブそうな奴がお頭のクリ責めに  
耐えられるわけないでしょ!」

「サア...?  
どっしてあんな声...」

じわ...

「そりゃ気持ち良いからだよ...  
もうすぐお前も判るから安心しな」





「……あ、あ……」

ヒクッ

「おー、よく濡れてるな。  
じゃあ俺も味見と行こうか  
お前ら手を離すなよ」

くちゅ♡

「大丈夫ですよ。  
すっかり惚けちゃってますから  
すぐに自分から腰振るでしょ」

「(何で私、ドキドキして……！  
サラがあんなになってるの？！)」

「お友達のエッチな姿見てたら興奮したか？  
ここからが本番だからしっかり見とけよ」





「んっ……！」  
あ、なっ……いやあ……あ……！」

「おお……これは……。  
良いもの持ってるじゃねーか……！」

「入れられて起きちまったってか？  
ま、すぐに天国行きだから安心しろよ！」

「ああ、サラあ……！」

「ヒビビ！ダチがレイプされてんのだ  
何ガン見してんだよ！」





「あっ、あっ!!  
やあっ、んっ!!  
あはあっ!! ああっ!!」

「いいぞお、サラ!  
お前はこの辺か!?  
もっと鳴け! イキまくれ!  
オラオラッ!」

「ああっ! そご、ちめっ!  
きもち、いび、よおお...っ。!」

「やっ...! だめっ!  
そご、触ら...ない、でえ!」

「何言っただんだ! 服越しに濡れてんの分かるぞ!  
友達と同じ気持ちにしてやるからよ!」





「一緒にくぐれ……」

「ふあっ、ああああっ！」

ひんひん  
ひんひん  
ひんひん

「あ……。なか、あつら……。よお……」

「あんっ、やっ！  
何かくるっ！……んんっ！」

「ビビッ！お友達と一緒にイケたな！

よおし、ご褒美やるからあっち行こうなあ……」





「あ……あ……」

「グクク…何て顔してんだ、このガキ…」

「よおし、仕込みの準備終わりだ…。  
客は選ぶが、上物だからしっかり仕込むぞ」

「みたいつすね。お頭があんなに余裕無くなったのは  
久しぶりに見ましたよ」

「おう、最高だったわ。アジトで本調教の時にやってみろ」

「へー」

「ん？もう一人はどこ行った？」

「ああ、あいつが奥の方に連れて行きましたよ」

「そうか。じゃあ終わるまで一服したら  
こいつらアジトに運ぶぞ」

とろろ…



「トトトトーじゃあ2人でたっぷり  
楽しもうぜえ……！」

「いや……やめて……！」

「こんなの……！」

「へえ……そんなに嫌がるなら

俺もあつちのお友達と遊ぼうかなあ」

「!?」





「カシラにあんだけヤラれてんだ…。俺の極太もぶち込んでやったら頭おかしくなっちまうかもなあ」

「ダメっ…サラにはもう手を出さないで…!」

「いやあ…それなら誰かさんが代わりに楽しませてくれねえと」

「お願い…私のこと好きにして良いから…!」

「トトト…そっすそっす」

「ガキは素直が一番ってな…」



「ほら、こんな風にされると  
気持ち良いだろ？  
お友達みたいに鳴いてみるよ？」

「別に……こんなもの……  
気持ち良くなんてっ……んっ……！」

「何だよ、我慢してんのか？  
そういうのも悪くないけどよお  
今はかわいい声聞きたいんだよなあ」

「っ……くっ……ん……！」

「しよつがねえなあ……絶対我慢できねえ  
最高に良いこととしてやるよ」



「あん！なにっ……  
気持ち、わ……ああっ……！！」

「どうだこれ？  
あたたかくて柔らかくて  
たまんねえだろ」

「あっ！ふあっ！  
やっ……！それ、だめえ……！！」

「そんなに良がつついて  
何がダメだよ……ほおら……」

ゾクッ  
ゾクッ  
ゾクッ

フル  
フル  
フル

メロメロ  
メロメロ  
メロメロ

「はっ、あ……！！  
何か……くるっ……！……  
「……」



「んっ！」

「あああああーっ！」

ぶしゃああ

「おー、派手に噴いたなあ  
お前ら2人して、ガキのくせに  
淫乱なんだなあ」

「う…あ…」

「でもよ…いった後に  
そのままされ続けるのが  
最高なんだぜ」

「…かはっ！やっ、やめへっ！  
いまだめっ、つらいの！あくっっ！  
「ヒヒヒ…やめるかよ」











「あ、ああー！……！」

「漏らしやがった！  
そんなによかったかあ！」

「ああ、あ……は……ま……ま……！」

あははは  
はははは

ア

ッ

ッ



「……………あう……………」

「ヒヒヒ…おーい、大丈夫かあ？  
本当に天国にイツちまったかかって  
心配しちまったよ」

「………」

「あーあ、こんなんじや  
入れても面白くねえなあ…  
お、そうだ！良いこと思いついた

アジト行ったらお友達と一緒に  
もっと良いことしてやるから  
楽しみにしとけよ」

「サ…ラ…」

ひんひん  
ひんひん





「ふあ…ああ…!!  
すき…それ…すき…」

「ビビビ…だいぶ素直になつてきたなあ  
そうやって従順にすればみんな  
可愛がつてくれんだ…覚えとけよ」

「はあ…おぼえる…から…んっ  
もっど、もっどしてえ…っ…!!」

あははは  
あははは

ゴ  
ゴ





「オラッ！」

「こういうのでグリグリされつと

気持ち良いだろお！」

「でも今からそんなに悦んでたら

もたねえぞお？」

「これからもっと色んなモノ  
教えてやるんだからなあ！」

オラッ  
オラッ  
オラッ

オラッ  
オラッ  
オラッ

オラッ  
オラッ  
オラッ

オラッ  
オラッ  
オラッ





「あっ、あんっ、だめっ……!!  
カナ……はげしっ……あはあ……っ」

「ふあっ、んあもあっ  
サラ……サラあ……!!  
きもちいい、よお……!!」

「おーおー、今日も朝から盛ってるねえ  
そろそろこいつらも調教完了だな」

「買い手も決まったし、そうやって  
やっつけられるのも今日が最後だから  
しっかり楽しんでおけよ!!」





その後、彼女たちの行方を知るものは  
誰もいなかった…





ふ、あゝ♡

あゝ♡

あたし……

負けな……ん？

す、す、す……

す、す、す……







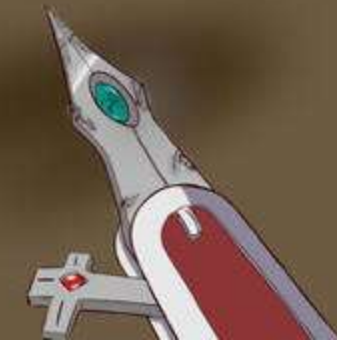
あはれ  
あはれ  
あはれ

あはれ  
あはれ  
あはれ

あはれ

あはれ

あはれ  
あはれ  
あはれ







Kiss

♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

Kiss



「もう一回イかせてやるよ」

「やあっ！ダメっ！  
そっ！もっ！だめえっ！」

「あっ、あっ！！  
やっ、んはっ！  
ああっ！んっ！  
とけゆ…そご…！！  
とけひやうう……！！」

「私がサラの代わりになるからっ！」

「ほお…じゃあ代わりが務まるか  
試してやるよ」





「あはああああっ……！」

「もうイったのかよ……  
情けねえ冒険者様だな……」

「俺らみたいな賊にあっさり負けて  
ま○こイジられて泣かされてんの  
無様過ぎるだろ、この雑魚ガキ！」

「あんっ！あっ……  
やだあ……気持ち、わるいら……！」

「そんな声出して体よじって何が嫌だよ！  
気持ち良いの間違いだろお！」

































































































